

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	川上夏林
論文題目	フランス語心理動詞の認知意味論的研究 —感情動詞と感覚動詞のイベント構造について—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、フランス語において経験者が目的語に置かれる心理動詞(目的語型心理動詞)のうち、この構造をとりやすい感情動詞と感覚動詞の事象構造およびアスペクト構造を解明することによって、ある動詞が心理動詞として解釈される条件、行為動詞から心理動詞に転用されることが多いことの原因、そして、感情動詞と感覚動詞の間にある共通性と相違を明らかにすることを目的としている。本論文は全6章で構成される。</p> <p>まず第1章では、経験者が主語に置かれる動詞(主語型心理動詞)と目的語型心理動詞の違いをめぐる先行研究を概観し、目的語型をとりやすい感情動詞と感覚動詞に研究対象を限定した上で、本論文の研究目的を設定している。</p> <p>第2章では、語彙概念構造(LCS)の分析による心理動詞へのアプローチを批判的に検討し、LCSでは使役動詞と目的語型心理動詞の共通点を部分的に捉えることはできるものの、事象構造の面でもアスペクト構造の面でも、行為動詞から転用された心理動詞を十分に分析できないことを指摘している。その問題点を踏まえ、本研究では事象構造を参与者間の意味的關係とアスペクト構造に分けて分析する方針を示し、それぞれ、Ronald Langackerによる事象構造の記述方法(Stage model)とWilliam Croftによるアスペクト構造の分析方法を導入している。</p> <p>第3章は心理動詞とは何かという問いに答える章である。本研究はNicolas Ruwetによる「感じられること(éprouvé)」という心理動詞の定義を発展させ、「今」、「ここ」における「私」が感じるものとして心理事象を定義し、心理動詞は語彙的に固定したものではなく、心理事象を表す文の中で使われて初めて心理動詞として解釈されるという構文論的観点を打ち出す。さらに、「今」「ここ」「私」というパラメータの内容を、主語の指示対象の性質、経験者の人称そして時制という項目の分析を通して明らかにすることで、心理動詞性には3つの段階が区別されることを示している。すなわち、主語が行為者ではなく、時制が現在に限定され、経験者が一人称である「表出型」(もっとも心理動詞性が高い)、表出型から時制と経験者に関する制約が外れた「描写型I」、さらに主語に対する制約もなくなって意図的な行為者が主語に立ち、感情動詞のみで可能となる「描写型II」(もっとも心理動詞性が低い)である。</p> <p>第4章および第5章は、第3章で導入した心理動詞性の3つの段階にしたがって、感覚動詞と感情動詞をそれぞれの章で分析している。この2つの章に共通して、動的受動文あるいは形容詞的受動文への書き替えテストと、完了時制(直説法複合過去)と未完了時制(直説法現在および半過去)のそれぞれと共起可能な時間副詞句を使ったテストを用いて、行為動詞が心理動詞に転用されるときに生じる参与者間の意味的關係とアスペクト構造の変化を分析している。</p> <p>これらの分析を通して、第4章では感覚動詞が取りうる4つの構文タイプをまとめた上で、感覚事象では感覚を引き起こす原因、刺激を受ける身体部分および刺激を知覚する主体という3者が区別可能であることから、身体部分を対格、経験者を与格に置いた構文タイプが存在するのに対し、この部分・全体關係が成立しない感情事象ではこの構文タイプが存在しないことを明らかにしている。また、感覚が身体において生じるメカニズムと使役事象の類似性と相違を分析し、接触と一時的な状態性が感覚動詞の特徴であることを主</p>			

張している。さらに、行為動詞が感覚動詞に転用される時、動詞の表す意味作用領域は物理的領域のまま変化しないため、この転用を成立させているのは誇張法と考えられるのに対し、感情動詞に転用される時には意味作用領域が物理的領域から心理的領域へメタファー転移していることも議論している。この違いにより、描写型Ⅱが成立するためにはメタファーによる作用領域の転移が必要となり、感覚動詞には描写型Ⅱが存在しないことが説明されている。

第5章は感情動詞について、受動的な感覚事象とは異なり、経験者側からの認知作用が重要な役割を果たすという特徴により、感情事象は感覚事象とは異なるイベント構造を備えていることを示している。特に、描写型Ⅱは感情動詞でのみ成立することから詳細に事象構造およびアスペクト構造を分析し、感情の変化が段階性を持たず、デジタル的性質を持っているため、状態焦点型または状態変化焦点型のアスペクト構造となることを明らかにしている。これと同時に、困惑や不安などは状態焦点型、驚きのような瞬間的事象は完了時制とともに状態変化焦点型となるなど、アスペクト構造の違いが事象の意味的性質と関連していることも議論している。

第6章は結論であり、全体の議論をまとめた後、本研究の貢献として、心理動詞という語彙項目が存在するという先行研究の考え方を転回させ、文の中で心理動詞性が現れるという見方を提示したこと、そしてその見方をとることによって、行為動詞との共通点と相違を明らかにし、さらに、感情動詞と感覚動詞という区別の難しいカテゴリーの違いを捉えることが可能になったことを挙げている。最後に、感情と感覚という事象間の関係のさらなる分析、経験者が主語に立つときとの違い、感情・感覚以外の心理事象も対象とした分析など、より包括的な研究に向けての展望を示している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、フランス語において経験者が目的語に置かれる心理動詞について、認知言語学的な事象構造の分析ならびにアスペクト構造の分析を通して、ある動詞が心理動詞として解釈される条件、行為動詞から心理動詞に転用されることが多いことの原因、そして、感情動詞と感覚動詞の間にある共通性と相違を明らかにすることを目的とするものである。本論文の特筆すべき意義は大きく以下の3点にまとめられる。

まず、心理動詞というカテゴリーそのものの定義にかかわる重要な提言を十分な説得力をもって行っている点を指摘できる。従来、動詞カテゴリーは語レベルで決まっているものと見なされており、心理動詞も同様の扱いを受けてきた。しかし、このような見方では *frapper* (hit)、*casser* (break) といった物理的行為を表す動詞が心理状態を表す動詞に転用されることを説明できない。これに対し、本論文では、心理動詞は文の中で初めて心理動詞性を帯びるという構文論的観点に立ち、心理状態を「今」、「ここ」で「私」が感じるものとして概念的に規定した上で、それら进行分析するために主語の指示対象の性質、経験者の人称および時制に着目し、心理動詞性が段階性を持つものであることを示している。この成果は、直観的理解にもとづいていた心理動詞というカテゴリーに関する理解を大幅に進展させているという点で極めて高く評価できる。

次に、経験者が目的語に置かれる心理動詞構文が存在する理由を明らかにしている点である。フランス語学においては *Nicolas Ruwet* や *Maurice Gross* によって広い範囲にわたって心理動詞の記述が行われており、理論的にも、主語型や目的語型の心理動詞があることは十分に認識され、生成文法の流れの中で、経験者が統語的に実現される位置の交替現象として関心を集めてきた。また、語彙概念構造によるアプローチによって、目的語型心理動詞と使役動詞が対比的に分析されているものの、事象構造を十分に記述できているとは言えなかった。本論文は「今」「ここ」「私」が感じるものとして心理事象を定義し、これらの特徴を分析するために *Ronald Langacker* の主体化の議論や *William Croft* のアスペクト構造の分析を効果的に援用することで、行為動詞が心理動詞に転用される機序を明らかにし、目的語型心理動詞が存在する理由を説明することに成功している。

最後に、行為動詞が心理動詞へと転用されるときに生じる変化を、事態の参与者間の意味的關係とアスペクト構造という形で明示的に示している点をあげることができる。心理動詞が状態性と結びつくことは *Zeno Vendler* によるアスペクトの分類以降、当然のこととして考えられてきたが、活動や達成、到達などのアスペクトを持つ行為動詞が心理動詞として使われるときに状態性を帯びるメカニズムは自明ではなく、感情と感覚でもアスペクト解釈が異なることがある。本研究では、心理動詞として使われるときにはまず、事態参与者の意味的關係が変化することを受動化テストなどによって明らかにし、それにともなってアスペクトも変化することを緻密な分析によって示している。さらに、行為動詞が元々備えていた意味に応じて、心理動詞として解釈されるときにも結果状態や状態変化の側面など、焦点が当たるアスペクト局面が異なることや、感情と感覚という、直観的にはよく似ている2つの事象の間に区別すべき理由が存在することなど、行為動詞と心理動詞のつながりや心理動詞内におけるカテゴリー間の関係を的確に捉えている。物理的領域から心理的領域へのメタファーといった、容易にたどりつくことのできる説明にとどまることなく、その内実を丹念に記述・分析しているところは、質・量のいずれにおいても極めて優れたものである。

これらの意義の一方で、本研究をさらに発展させるための課題も指摘することができる。本論文では「語彙型心理動詞」と「転用型心理動詞」という区別を導入し、行

為動詞からの転用に焦点を当てた分析が展開されているわけだが、扱われている動詞のほとんどは心理動詞としての用法が定着し、辞書にも記載されているものである。その意味ではすべてが語彙型心理動詞とも呼べるものであり、本論文が批判対象としている、語彙的に心理動詞が存在するという見方に再度、取り込まれてしまう危険性を孕んでいる。心理動詞としては十分に定着していない動詞が心理的意味を表す用例を分析することにより、あるいは、通時的研究によって心理動詞としての用法が定着するプロセスを解明することにより、本研究の主張はより強固なものとすることができると考えられる。しかし、この課題は本研究の不備が招いたものではなく、むしろ本研究が解明した心理動詞性および転用のメカニズムにもとづいて初めて可能になるものである。この点においても、本論文は博士論文にふさわしい射程の広さを備えた論文であると言える。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和3年12月18日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降